

# 県立多治見病院 緩和ケアチーム通信

## 2025年10月号 vol. 172

緩和ケアチームメールアドレス： [kanwa@tajimi-hospital.jp](mailto:kanwa@tajimi-hospital.jp)

自施設での緩和ケアに関する悩みごと、県病院緩和ケアチームに対する意見や要望、施設ごとでのオンライン事例検討や勉強会などの開催要望など、なんでもお寄せ下さい。



### ～ チームメンバーより一言 ～

#### 緩和ケア外来担当看護師・山本 知枝子

『行く先は未定です』

エッセイスト谷川俊太郎氏の『行く先は未定です』の題名に惹かれて手に取った。谷川氏は2024年11月13日92歳で亡くなる2週間前まで。「ぼつりとおかしく」「ぼつりと鋭く」語っていたと本の帯に書かれていた。本の目次は「いきる」「はなす」「あいする」「きく」「つながる」「しぬ」という構成である。私たちが普段の生活の中で使っている言葉ではあるが大切な言葉であることを再認識してくれる内容となっている。

詩の一部を紹介したい。

『いのち』 ある年齢を過ぎると どこもいたくなくても 体がぎこちない けつまずいて転んでから  
それが分かり 体は自分が草木と 同じく枯れゆくを知る  
人間として 社会に参加した 忙しい「時間」は 悠久の自然の「時」に 無条件降伏する  
落ち葉とともに 大地に帰りたい 変わらぬ夜空のもと  
言葉で意味を与えられて 人生は素の生と異なる 己が獣とも魚とも違う 生きものなのを  
出自を共にしながら 人は誇り 人は恥じる

私自身年金を受け取る歳になり、死について考えること時が多くなった。がん患者との関りが多い中、考えさせられることはあっても、どこかで第三者の立場で他人事として受け止めていたと思う。しかし、歳をとるごとに「いつかは迎える我が死」を実感するようになってきた。朝目覚めない可能性だってある。そういう日が来るかもしれないことを頭の片隅におきつつ、残された人生を人とのつながり、楽しみ、感謝し暮らしたいと願っている。

#### 薬剤師・永治 正太郎 「ご挨拶と学会参加報告」

はじめまして。今年1月に入職しました薬剤師の永治（ながや）と申します。

引退してしまいましたが、バスケットボールを20年ほど継続していました。身長が192cmありますので、白衣を着たデカイ人が外来でバタバタと働いていたら私だと思えます。前に勤めていた病院では、がん化学療法・緩和ケア・栄養サポートの3本柱で、集学的治療をモットーにチーム医療を展開してきました。今後は岐阜県立多治見病院で、患者の治療の一助となれればと思っています。まだまだ不慣れな点が多く、まだ緩和ケアチームに参加できていませんが、今後ともよろしくお願いいたします。

さて、少し前の話になりますが、6月に開催されました第18回日本緩和医療薬学会年會に参加いたしましたので、報告させていただきます。当院からも私を含め5名の薬剤師が学会に参加し、自己研鑽に励んできました。

年會のテーマは「プロフェッショナルネットワークの構築」と患者を支えるために病院・薬局・研究者・企業の連携を強化し、薬学的な知識と技術の幅を広げることを目的に様々なセッションが開催されました。私もその中の参加型ワークショップで、『かんわ Cafe Produced by TSOP All Japan Group』のファシリテーターとして声がけしていただき、日本全国の様々な薬剤師（緩和ケアの猛者）とディスカッションを繰り広げました。かんわ Cafeの目的である顔の見える関係づくりを構築という目標は達成できたかなと思います。その経験を生かして今後、県病院でも顔の見える関係づくりを構築していければと思います。よろしくお願いいたします。

